

スペイン語における不規則単純過去形の通時的変化*

Evolución de las formas irregulares del pretérito simple en el español

寺崎 英樹

TERASAKI Hideki

1. 序

ロマンス語の動詞は他の品詞と異なり、音韻変化の一般的な法則に従わず、独自の通時的変化を遂げることが少なくない。これは動詞が法・時制および人称・数により活用するパラダイム (paradigma, 語形変化表) を構成するため、その体系の規制力が音韻変化の一般法則を妨げることがしばしば起きるからである。また、頻度の高い動詞のパラダイムが他の動詞に強い類推作用を及ぼし、本来の形態を変えてしまうこともある。本論ではこうした類推作用に注目しつつスペイン語の単純過去時制に焦点を当て、主要な不規則形がいつ頃どのような通時の変化を経て、今日の形態に到達したかを資料調査に基づいて考察する。

2. 現代スペイン語の単純過去形

2.1. 単純過去とは

単純過去とはスペイン語で *pretérito perfecto simple* または単に *pretérito* と呼ばれ、フランス語では単純過去 (*passé simple*)、イタリア語では遠過去 (*passato remoto*) と呼ばれる時制に相当し、日本のスペイン語学界では完了過去、点過去とも言う。歴史的にはラテン語の完了 (*perfectum*) に由来する。

2.2. スペイン語の単純過去形態の特徴

スペイン語の不規則な単純過去形を他の主要なロマンス語、例えばフランス語やイタリア語と対比すると、次のような特徴を指摘できる。(1) 不規則変化の類型が非常に限られており、不規則動詞の数も少ないこと、(2) 不規則変化そのものも、変化パターンの画一化が進んでいること。

このうち、(1) について例えば、西和辞典で現在もっとも収録語数の多い『小学館西和中辞典』(見出し 8 万語) の巻末の動詞活用表を調べてみると、不規則な単純過去語幹を持つ動詞のモデル数は正書法変化動詞 (音韻的には規則的だが、正書法上は書き換えを要する動詞) を除き 25 である。しかし、その中の 6 つは母音変化動詞と呼ばれるグループに属し、過去形では 3 人称のみ語幹母音が変化する特徴を持ち、準規則動詞と言うべき存在なので、¹これを除くと、真の意味で強変化動詞と言える不規則な過去語幹を持つ語は 19 にすぎない。

次に(2)に関しては、ほとんどの不規則動詞の語幹母音が-iまたは-uに画一化していることが指摘できる。² 19の不規則動詞を語幹母音により分類すると、次のようになる。かっこ内は1人称単数形を示す。

A) -i-: *querer* (quise), *decir* (dije), *hacer* (hice), *satisfacer* (satisfice), *venir* (vine), 計5

B) -u-: *haber* (hube), *tener* (tuve), *estar* (estuve), *andar* (anduve), *poder* (pude), *caber* (cupe), *saber* (supe), *poner* (puse), *aducir* (aduje), *ser* (fui), *ir* (fui), 計11

C) その他 : *traer* (traje), *ver* (vi), *dar* (di), 計3

このうち、単音節語の *vi*, *di* は語幹母音を持たないが、語幹母音の-iと活用語尾が融合していると見なすことができるので、*traje* のみが-i/-u-を含まない唯一の例外ということになる。

3. 中世スペイン語の単純過去形

3.1. 不規則語幹の種類

12~13世紀に中世スペイン語がその姿を現したとき、ラテン語にあった不規則完了形の多くはすでに規則化していた。しかし、初期の段階では現代スペイン語よりも単純過去の形態が多様であり、不規則動詞の数も多かった。ラテン語の不規則な完了形には大別して4つの類型があったが、現代まで残る前記の不規則動詞の多くはその類型を受け継ぐものである。

A) -uī 型 — その代表的なものはラテン語の *habuī* (*habeō*) であるが、スペイン語では語幹母音が-oに変化した : *habuī* > **aubi* > *ove*。この類型は影響力が強く、他の類型からこの型に移行した動詞もある : *sapivī* (*sapiō*) > *sapui* > *sope*, *cēpī* > *capui* > *cope*。³ 一方、語幹に-ōを含む動詞の場合は語幹母音を-uに変えた : *potuī* (*possum*) > *pude*, *posuī* (*pōnō*) > *puse*。ただし、中世スペイン語初期には、この-uが1人称単数以外では-oと交替していた。⁴

起源的には、*fuī* (*sum*) > *fui* もこの類型に属する。なお、*ivī* (*eō*) は他のロマンス語と同じく継承されなかったが、中世スペイン語では *fui* が *ser* 「である」だけでなく、*ir* 「行く」の過去形としても使用されるようになった。

B) -sī 型 — シグマ完了と呼ばれるもので、代表的な動詞としては *dixī* (*dīcō*) > *dixe*, *addūxī* (*addūcō*) > *aduxe* がある。なお、ラテン語の-x- [*ks*] は中世スペイン語では通常の音変化の法則に従い、硬口蓋摩擦音 [x] に変化した。⁵ この型の動詞は頻度が高いので、中世スペイン語では他の種類の動詞にも類推で広がった。

C) 語根母音が交替するもの — この類型でスペイン語に残ったのは3つの動詞のみである : *fēcī* (*faciō*) > *fize*, *vēnī* (*veniō*) > *vine*, *vidī* (*videō*) > *vide* / *vi*。1人称単数で母音-ēが *fize*, *vine* のように-iに変化したのは直後の人称語尾-īにより母音変異 (*metafonía*) が生じたためである。語尾-ī自体はその後-eに変化した。直後に-iまたはヨッド (半母音の *j*) を持たない他の人称、例えば2人称単数 (*veniste*) では母音変異が起きなかったので、中世スペイン語初期には人称により語幹母音

-iと-eが交替していた。⁶ verは母音間の-dを保持する形式と脱落した形式が共存していたが、結局後者viが生き残った。

D) 語幹の重複 (reduplicación) を行うもの：この類型でスペイン語に残ったのは2つの動詞だけである：stetī (stō) > stetui > estide; dedī (dō) > dey > di. 後者の場合は母音間の-dが脱落したため、重複はなくなった。

3.2. 単純過去の活用語尾

小論では単純過去の語幹を主題とするので、活用語尾の変遷については最小限しか触れることができない。次に、ラテン語 habēō の完了と中世スペイン語 (13世紀頃) の aver および近代スペイン語 haber の過去形の人称語尾を対比して示す (表1)。

表1. 単純過去の活用語尾の変遷

ラテン語	habēre	hab-uī	hab-uistī	hab-uit	hab-uimus	hab-uistis	hab-uērunt
中世スペイン語.	aver	ov-e	ov-iste	ov-o	ov-íamos / ov-imos	ov-iestes / ov-istes	ov-ieron
近代スペイン語.	haber	hub-e	hub-iste	hub-o	hub-imos	hub-isteis	hub-ieron

スペイン語では単純過去の3人称単数語尾が-oとなるのが特徴であるが、これは規則動詞の語尾 (cantāvit > cantaut > cant-ó) からの類推による。この形式が採用された理由は、通常の音変化に従う形式 *ov-e は1人称単数と同形になってしまうため、回避したものと見られる。また、2人称複数語尾は、現在形 av-éis からの類推で生じた二重母音を含む-isteis形式が16世紀頃出現し、次第に本来の-istesを駆逐し、18世紀には完全に定着した。

4. 中世スペイン語から近代スペイン語に至る単純過去形の変化

中世スペイン語から近代スペイン語に至る間に単純過去語幹に起きた変化を概観すると、次のような点を指摘できる。(1) 中世スペイン語にはまだ多数あった不規則形が規則化し、不規則動詞の数が非常に縮小した。(2) 中世スペイン語では同じ動詞の活用形に異形が共存する場合が少なからずあったが、次第に単一の形式に整理された。(3) ラテン語に由来する古い過去語幹を他の動詞の類推により新たに作り替えた例がかなり見られる。(4) 不規則な過去語幹の母音に画一化が起き、-iまたは-uに収斂した。

これらの変化では動詞形態の通時的変化に顕著な類推作用が見られ、使用頻度の高い動詞のパラダイムが他の動詞に影響を及ぼす働きをしたと考えられる。とりわけ中世スペイン語で影響力が強かった見られるのは aver である。この動詞は「持つ」または「…がある」という意味の通常の動詞としても複合時制の助動詞としても頻繁に使用されたからである。

5. 主要な不規則過去形の通時的コーパスによる調査

5.1. 調査目的と資料

以上の点を踏まえ、次の2点に焦点を当て、通時的コーパスを利用して考察を行った。(1) *aver* など使用頻度の高い動詞が他の動詞の単純過去形態にいつ頃どのように影響を及ぼしたか。(2) 不規則な過去語幹に見られる母音-*i*と-*u*はいつ頃一般化したか。

調査を行った理由は、これらの変化が中世スペイン語から近代スペイン語に移行するまでの期間に起きたことはよく知られているが、それが具体的にいつ頃生じて、いつ頃一般化したかということは従来文献であまり取り上げられていないからである。利用した調査資料はスペイン王立学士院のコーパス CORDE (Corpus Diacrónico del Español) である。主要な動詞について中世スペイン語が出現する12世紀から18世紀までの期間を世紀別に区切って単純過去の出現数を調査した。地域はスペインに限り、アメリカ地域は含まない。スペイン語史の時代区分としては、概略12~15世紀が中世スペイン語、16~17世紀が黄金世紀スペイン語、18世紀からが近代スペイン語の時代に該当する。調査した主な動詞は *haber* (*aver*), *tener*, *saber*, *estar*, *andar*, *poder*, *hacer* (*fazer*), *traer* の計8である。

5.2. 主要な不規則動詞の影響

A) *aver* (> *haber*) 一過去3人称単数形の出現数は表2に示すとおりである。なお、表の横軸は世紀、縦軸の数字は各形式の出現回数、かつこ内は事例の出現する文献数を示す。特に別の表示がない限り、以下の表も同じ。

表2. *aver* > *haber* (3, sg. *hubo*)

	12	13	14	15	16	17	18
<i>ovo</i>	202 (3)	1,666 (90)	1,969 (112)	7,101 (324)	2,550 (143)	13 (7)	7 (4)
<i>hovo</i>	-	1 (1)	9 (6)	335 (24)	367 (20)	1 (1)	-
- <i>o</i> - 計	202	1,667	1,978	7,436	2,917	14	7
<i>uvo</i>	-	5 (2)	91 (5)	435 (41)	1,290 (90)	280 (29)	43 (2)
<i>huvo</i>	-	1 (1)	3 (5)	111 (17)	718 (81)	449 (54)	516 (36)
<i>hubo</i>	-	-	3 (3)	120 (21)	5,395 (314)	3,712 (411)	764 (152)
- <i>u</i> - 計	-	6	97	666	7,403	4,441	1,323

これを見ると、12世紀から15世紀まで(h)ovoの形式が圧倒的に多いが、13世紀に出現した(h)uvoが少しずつ勢力を伸ばし、16世紀になると激増して逆転する。

B) *tener* 「持つ」一過去3人称単数(表3)は、ラテン語の完了 *tenuit* (*teneō*) が継承されず、*aver* からの類推で *tovo* が形成された。13~14世紀に *tovo* が圧倒的であるが、15世紀には語幹母音を変えた *tuvo* がかなり勢力を拡大し、16世紀にはやはり大逆転して、*tovo* を圧倒する。

表3. *tener* (3, sg. *tuvo*)

	12	13	14	15	16	17	18
<i>tovo</i>	6 (2)	216 (36)	267 (42)	708 (106)	306 (40)	1 (1)	1 (1)
<i>tuvo</i>	1 (1)	14 (2)	39 (10)	492 (96)	10,537 (574)	6,589 (633)	9,974 (212)

C) **saber** 「知る」—3 人称単数形 (表 4) は, 13 世紀はまだ *sopo* が優勢であるが, 14~15 世紀には早くも *supo* が著しく伸張し始め, やはり 16 世紀に圧倒的に優勢となる。

表 4. *saber* (3, sg. *supo*)

	12	13	14	15	16	17	18
<i>sopo</i>	19 (3)	1,219(56)	999 (63)	1,436 (90)	150 (8)	4 (2)	2 (1)
<i>supo</i>	-	43 (10)	964 (44)	1,258(144)	4,651(479)	2,133(403)	445 (101)

D) **estar** 「…にある」—3 人称単数の場合 (表 5) は, ラテン語の重複語幹を持つ形式 *stetit* に由来する *estido* が 13 世紀まで優勢であったが, 同時期に *estudo* が出現していて, 14 世紀にはもっとも優位に立った.⁷ しかし, すでに 13 世紀には *aver* にならった新しい語幹 *estovo* あるいは *estuvo* が形成されており, 早くも 15 世紀には両形式が *estudo* よりも優勢になった. 続く 16 世紀には *estuvo* が圧倒的となった。

表 5. *estar* (3, sg. *estuvo*)

	12	13	14	15	16	17	18
<i>estido</i>	36 (3)	176 (24)	28 (11)	7 (4)	-	-	-
<i>estodo</i>	-	-	1 (1)	1 (1)	-	-	-
<i>estudo</i>	-	67 (23)	308 (33)	106 (31)	5 (3)	-	-
<i>estovo</i>	-	15 (5)	40 (13)	588 (64)	379 (21)	-	-
<i>estuvo</i>	-	18 (2)	58 (7)	549 (67)	5,007(433)	2,712(359)	674 (116)

E) **andar** 「歩く」—3 人称単数形 (表 6) はラテン語の完了形を継承せず, *estar* にならって形成された *andido* が 13 世紀まで優勢であったが, 同じ時期に語幹母音を -u- に変えた *andudo* がそれと拮抗するほどに勢力を伸ばし, 14 世紀には優位に立った. しかし, 15 世紀には *aver* にならって再編された *andovo* または *anduvo* が優勢になり, 16 世紀以降は *anduvo* が勝ち残った。

表 6. *andar* (3, sg. *anduvo*)

	12	13	14	15	16	17	18
<i>andido</i>	11 (2)	129 (22)	20 (8)	9 (5)	-	-	-
<i>andiedo</i>	-	-	1 (1)	-	-	-	-
<i>andudo</i>	-	98 (26)	89 (26)	66 (24)	3 (1)	-	-
<i>andovo</i>	-	4 (1)	5 (2)	138 (23)	113 (9)	-	-
<i>anduvo</i>	-	17 (2)	41 (3)	325 (45)	1,477(212)	589 (202)	80 (39)
<i>andó</i>	-	19 (7)	19 (4)	3 (2)	7 (3)	1 (1)	-

なお, 規則形の *andó* も上記のとおり, すでに 13 世紀に出現していたが, 他の多くの不規則動詞で起きたように規則形が広がることはなく, 17 世紀を最後に完全に消滅した。

以上のとおり, *aver* の過去形から類推で形成された -ovo 型の過去形が *estar*, *andar* で一般化するのには 15 世紀であり, 上記のどの動詞も -ovo から -uvo への移行が一般化するのには 16 世紀と見られる。

5.3. 語幹母音の画一化

A) **poder** 「…できる」—過去語幹に-o-を持っていたが、中世スペイン語初期には人称によりこれが-u-と交替していた。問題は、このような交替がいつ頃終息し、-u-に画一化したかである。調査資料によると、3人称単数は初期から一貫して *pudo* が圧倒的に多く、*podo* の例はほとんど見られない。⁸ 一方、語幹に強勢のない2人称単数の場合は、*podiste* が優勢で、*puviste* がそれを上回るのは16世紀からである(表7)。⁹

表7. *poder* (2, sg. *puviste*)

	12	13	14	15	16	17	18
<i>podist(e)</i>	-	19	10	44	50	9	-
<i>puvist(e)</i>	-	6	4	11	121	109	25

これに対し語幹に強勢がなくても、その直後にヨッドがある場合、具体的には人称語尾に二重母音の-ie-を含む複数形では語幹に-u-が現れる形式が普通であった。例えば、3人称複数形では13世紀から一貫して-u-が優勢である(表8)。

表8. *poder* (3, pl. *puvieron*)

	12	13	14	15	16	17	18
<i>puvieron</i>	5 (2)	121 (32)	229 (43)	548 (80)	36 (17)	2 (19)	-
<i>puvieron</i>	3 (2)	640 (46)	671 (66)	1,191 (174)	3,293 (348)	1,471 (293)	440 (100)

したがって、13世紀頃の最も普通のパラダイムでは、主に2人称単数の母音が-o-に交替し、複数形では3人称およびヨッドを含む1~2人称複数で *-iemos*, *-iestes* の形式で-u-が優勢であったと見られる。しかし、15世紀には1~2人称複数でヨッドを含まない語尾-imos, -istesが一般化し、これらも-o-を伴うのがむしろ普通になったと推定される(表9)。

表9. *poder* の語形変化表

13世紀	<i>pude</i>	<i>podist(e)</i>	<i>pudo</i>	<i>podíamos / podiestes</i>	<i>puvieron</i>
15世紀	<i>pude</i>	<i>puviste</i>	<i>pudo</i>	<i>podimos / pudistes</i>	<i>puvieron</i>
17世紀以降	<i>pude</i>	<i>puviste</i>	<i>pudo</i>	<i>podimos / pudisteis</i>	<i>puvieron</i>

16世紀にはまだ人称により母音交替が見られるので、語幹母音が-u-に画一化するのは17世紀のことである。ovo型の過去形はすでに16世紀にuvo型への移行をほぼ達成しており、*pudo*型もそれに続いて語幹母音の画一化を達成したと見られる。

B) **fazer** (> *hacer*) 「する」—やはり初期には人称により語幹母音-e-と-i-の交替があった。調査資料を見ると、3人称単数は当初から *fize* の影響で生じたと見られる *fizo* が圧倒的に優勢だったようである(表10)。¹⁰

表 10. fazer / hacer (3, sg. hizo)

	12	13	14	15	16	17	18
fezo, hezo*	1	204	211	101	9	1	2
fizo, hizo	214	7,230	9,997	19,177	37,276	17,893	5,312

* hezo は 15 世紀に 1 例のみ現れる。

語幹に強勢のない 2 人称単数形は, feziste が一般的で, fiziste / hiciste が急増するのは 16 世紀, 逆転して支配的になるのは 17 世紀である (表 11).¹¹

表 11. fazer / hacer (2, sg. hiciste)

	12	13	14	15	16	17	18
fezist(e), heziste, feciste, heciste	16	445	209	386	498	53	-
fizist(e), hiziste, hiciste	1	22	34	27	266	340	73

1 人称複数について観察すると, -imos の語尾が一般化する 15 世紀には fezimos が優勢であったが, 16 世紀には fizimos を継承する hizimos / hicimos が急増し, 17 世紀には逆転して圧倒的となる (表 13). このように -e / -i の交替から -i に一元化する時期は, -o / -u の交替が -u に一元化する時期と符合している。

表 13. fazer / hacer (1, pl. hicimos)

	12	13	14	15	16	17	18
fezimos	-	27	28	3	-	-	-
fizimos, hizimos	5	263	74	34	7	-	-
fezimos, hezimos, hecimos	-	59	92	290	538	47	2
fizimos, hizimos, hicimos	-	13	34	45	436	342	308

複数形で人称語尾に二重母音 -ie- を含む -iemos, -iestes の場合, 初期の時代から語幹母音 -i- が概ね優勢であり, 逆にそれを含まない -imos, -istes では -e- が優勢であった。したがって, 13 世紀および 15 世紀頃の最も普通のパラダイムは表 12 のように推定できる。現代の活用形とともに示す。

表 12. fazer / hacer の語形変化表

13 世紀	fiz(e)	fezist(e)	fizo	fiziemos / fezimos	fiziestes / fezistes	fizieron
15 世紀	fize	feziste	fizo	fezimos / fizimos	fezistes / fizistes	fizieron
17 世紀以降	hice	hiciste	hizo	hicimos	hicisteis	hicieron

C) **traer** 「持ってくる」—この動詞は以上のように不規則過去形の語幹母音が -i- または -u- に画一化する中で例外をなしており, 特異な歴史的展開を見せる。次に 3 人称単数形を示す (表 14)。

表 14. traer (3, sg. traje)

	12	13	14	15	16	17	18
traxo / traje (trajo)*	6 (-)	65 (-)	324 (2)	1,075 (35)	1,662 (890)	861 (646)	249 (179)
trasco	-	6	-	-	-	-	-
trayó	-	1	1	26	6	1	-
troxo	-	107	61	180	-	-	-
trogo	-	3	2	-	-	-	-
truxo / trujo (trujo)*	- (-)	- (-)	32 (-)	454 (4)	1,449 (560)	1,083 (671)	7 (6)

* かっこ内の trajo, trujo は内数

13 世紀には語幹母音-oを持つ troxo が優位に立ち、14 世紀には truxo も出現した。しかし、同じ時期に traxo が巻き返して生き残り、現代の traje に変化した。なお、13 世紀には trasco という特異な形式も出現したが、永続できなかった。¹² 結局、語幹母音としては例外的な-aを含む trajo が残ったが、その原因としては現在語幹との関連性が推測できる。¹³ trujo よりも traje の方が現在語幹 trae-との関連を想起しやすいと思われるからである。

6. 結論

少なくとも今回調査した文献コーパスに基づく限り、次の点が確認できた。近代スペイン語まで生き残った不規則動詞の中では使用頻度の高い haber (中世スペイン語では aver ~ ovo) の影響が大きく、他の類型を持っていた有力な動詞にも類推作用を及ぼし、その形態を再編させた。例えば、estar は初期にはラテン語に由来する過去語幹 estido を持ち、andar もこれにならった語幹 andido を持っていたが、どちらも早くから pudo (poder) にならった語幹母音を持つ形式 estudo, andudo を形成させた、しかし、14~15 世紀にはいずれも aver にならった新形式 estovo, andovo に置き換えられ、さらに、16 世紀には語幹母音-uを持つ uvo, estuvo, anduvo が圧倒的となった。

不規則動詞の語幹母音について見ると、-u/-o-に関しては、初期には 1 人称単数で-uを持つ pude, puse 型と-oを持つ ove, sope 型があり、pude 型は人称によって-u/-o-が交替していた。これはむしろ通常の音変化の傾向(無強勢の-i/-u->-e/-o-)に合致するが、交替は初期の時代から必ずしも一貫したものではなかった。ove には 13 世紀からおそらく pude 型の影響により uve が現れるが、これが一般化するのには 16 世紀以降である。pude 型は 2 人称単数・複数(語尾-iste / -istes) でしばらく-oを維持し続けたが、17 世紀にはすべての人称で-uに統一された。

語幹母音-i/-e-に関しては当初から一貫して-iを持つ quise (querer), dixе (dezir) 型のほかに語幹母音-u/-o-の動詞と同じく人称により母音が交替する vine (venir), fize (fazer) 型があったが、やはり交替は必ずしも一貫したものではなかった。やがて 1 人称単数の語幹の-iが他の人称にも類推によって広がるが、人称により広がる時期には相違があった。特に 2 人称単数・複数には長く

その変化に抵抗した。しかし、17世紀にはすべての人称で-iが一般化したと見られる。以上のように、語幹母音が全部の人称に関して-iまたは-uに画一化するのは17世紀以降であり、この時期にこれらの母音が単純過去不規則形に共通する典型的な標識として認識され、定着するに至ったものと考えられる。

註

* 本稿は日本ロマンス語学会第49回大会（神戸市外国語大学，2011年6月4日）において統一テーマ「ロマンス諸語における通時変化」の部門で口頭発表した草稿に修正・加筆を行ったものである。

1. 例えば、母音変化動詞 *pedir* 「要求する」は次のように変化する。

pedí, pediste, pidió, pedimos, pedisteis, pidieron.

2. ここで言う語幹母音とは語根母音 (*vocal radical*) と同義であり、幹母音 (*vocal temática*) のことではない。

3. 近代スペイン語では *supe, cupo* となり、語幹母音が-uに変化した。

4. García de Diego (1951: 248) によると、*poder* の過去形は1人称単数 *pude* を除き、すべての人称で例えば *podiste, pudo* のように語幹母音-oが維持されていた。

5. [ʃ] は17世紀頃さらに軟口蓋摩擦音 [x] に変化し、近代スペイン語では *dije, aduje* と書かれる。

6. Menéndez Pidal (1968: 318) によると、*fazer* は次のように母音が交替していた：*fize, feziste, fezo, fezimos / fiziemos, fezistes / fiziestes, fizieron*。ただし、12世紀にはすでに *fiziste, fizo* に画一化されていたとする。なお、同書では2人称複数に *feziste* という語形を挙げているが、*fezistes* の誤植と思われるので訂正した。

7. Menéndez Pidal (1968: 317) によると、*estudo* の形式は *pudo* からの類推により形成されたものである。なお、初期には *estido* と並んで、通常の音変化の法則に従う語幹母音を持つ形式 (*stetit >*) *estiedo* も存在したはずであるが、今回調査したコーパスには現れない。しかし、Mark Davies, *Corpus del Español* を参照すると、13世紀の *Libro de Alexandre* に1例現れる。

8. 調査資料によると、*pudo* は12世紀から現れるのに対し、*podo* は13世紀になって9例、14世紀に13例出現するが、大部分は動詞 *podar* 「刈り込む」の活用形などで、*poder* の過去形と見られるものはそれぞれ1例しかなかった。なお精査を要するが、初期から一貫して *pudo* が圧倒的であったことは確実である。

9. 一般に13世紀頃のスペイン語では語末母音-eが脱落する現象が広く見られた。ここでは脱落する形式としない形式を併せて示す。

10. カスティーリャ北部で古くから見られるf音の気音化および消失の現象 ([f] > [h] > [ø]) は

15~16世紀に一般化するが、本題から外れるので、以下では正書法上の f / h-の区別は無視し、併せて表示する。

11. 前記の通り、Menéndez Pidal (1968: 318) は 12 世紀に *fiziste*, *fiso* に画一化していたと述べているが、*fizo* はよいとして、*fiziste* が確立するまでにはこのように長期を要したようである。

12. *trasco* の形式は *visco* (*vivir*), *nasco* (*nacer*) など当時存在した不規則過去形からの類推により生じたと見られる (Alvar y Pottier, 1983: 251-262 参照)。なお、*visco*, *nasco* も、その後規則形 *vivió*, *nació* が一般化して、消滅した。

13. Alvar y Pottier (1983: 263) は、*tra-*形式は不定詞 *traer* からの類推によるものだろうと述べている。

参考文献

- Alvar, Manuel y Pottier, Bernard, 1983, *Morfología histórica del español*, Madrid: Gredos.
- García de Diego, Vicente, 1951, *Gramática histórica española*, Madrid: Gredos.
- Hanssen, Federico, 1913, *Gramática histórica de la lengua castellana*, Halle: Max Niemeyer.
- Lapesa, Rafael, 1981, *Historia de la lengua española*, Madrid: Gredos.
- Lausberg, Heinrich, 1966, *Lingüística románica*, Tomo II: Morfología, trad. por J. Pérez Riesgo y E. Pascual Rodríguez, Madrid: Gredos.
- Lloyd, Coloma, 1987, *From Latin to Spanish—Historical Phonology and Morphology of the Spanish Language*, Philadelphia: Memoirs of the American Philosophical Society.
- Menéndez Pidal, Ramón, 1968 (1ª. ed. 1904), *Manual de gramática histórica española*, 13ª. ed., Madrid: Espasa-Calpe.
- 中岡省治, 1993, 『中世スペイン語入門』, 大学書林.
- Palmer, L.R., 1954, *The Latin Language*, London: Faber & Faber.
- Penny, Ralph, 1991, *A History of the Spanish Language*, Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 高垣敏博 (監修), 2007, 『小学館西和中辞典』第2版, 小学館.
- 寺崎英樹, 2011, 『スペイン語史』, 大学書林.

参考ウェブサイト

- Davies, Mark: Corpus del Español [en línea], < <http://davies-linguistics.byu.edu/personal/> >, [最終閲覧: 29/4/2011]
- Real Academia Española: Banco de datos (CORDE) [en línea], Corpus diacrónico del español. < <http://www.rae.es> > [最終閲覧: 29/4/2011]